荒尾市立府本小学校　校長便り　№.１０５

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和8年6月１５日(月)

【雑感】指導者とは

とある名門高校野球部の監督がこの様なことを言っている。

「いくら指導者が熱を入れても、選手側が『やらされている』という意識でタラダラ練習をしていたのでは何の進歩もない。やる気の一発は、やらされてることの百発にも勝る。」

思うに、指導者は選手や児童生徒の「やる気」、すなわち「主体性」を引き出すことが仕事なのではなかろうか。

私も指導者の一人だが、指導だけやっていると疲れることがある。私などは特に知識もあまり無く情報の引き出しも少ないので、子ども達に教えること等、あまり持ち合わせていない。それよりも子ども達の「やる気」を引き出すための手立ては何かなかろうかと考える時間の方が長かったように思う。併せて、主体的な「学び」の楽しさを伝えてきたように思う。教え子達から聞くこの言葉は今でもとても嬉しい。「あの時は楽しかった!」今では社会人となった教え子たちに、人生の楽しさを伝えられるように自分自身をアップデートしている。

雑感　親友の母の死

親友と言うとそう沢山はいません。私にとってはこれからも付き合っていくであろう親友は2人です。一人は小学校では違うクラスで、中学、高校と6年間一緒に過ごした奴A。もう一人は小学4年から中3まで同じクラスだった奴Bです。こいつら（言葉遣いが不適切ですがこの方がニュアンスが伝わると思うんですよ。）とはことある度に飲み、口喧嘩ばかりの親友です。それだけ何でも言える仲間なんだろうと思います。

一昨年、Aから連絡がありました。こいつから連絡があることはあまりないので、何か重大なことかなとは考えていました。Bの母親が亡くなったというのです。Bの母親とは私も小学校の低学年から面識がありましたし、地域コミュニティの中で友達のお母さんということもあり、叱られたり、諭されたり、優しく包んでくださったりと、私には地域の母親的なつながりを感じていた方でした。連絡を受けたときは非常に大きなショックを受けました。私の母親はBの母親と職場を同じくしたこともあり、同様にショックを受けていました。

通夜当日。粛々と進むセレモニーの中で私は子どもの頃のBの母親と接する場面を思い出していました。同じ団地に住んでいて、私の母親が仕事でいなかったとき、「昼ご飯食べに来んね。」といって、そうめんをごちそうになったこと、このそうめんが凄く美味かったこと、そうめん食わせて貰ったと母に話したら、私の母親がぶどうを持ってBの家にお礼に行ったこと。ふと、思い出すこと一つ一つが切なくてたまりませんでした。

通夜の後半、御導師様がこう仰いました。「人間の死は、すぐ身近にあるものです。だから、今こうして生かされていることに感謝して、命を大切にしていくことが故人に対する感謝なのだと思いますよ。」確かにそうだなと思いながら、通夜の席を後にしました。

最近の若者に伝えたい。命は最後まで燃やし尽くすためにあるもの。与えられた命を適当に使ってはならない。勘違いしてはならない、君の命はたった一つしかないのだ。無駄にしてはいけない!

シリーズ「自分を語る」#１０５

学級を切り盛りするには、「仕掛け」が必要です。私がこれまでに行ってきた多くの行事も仕掛けの一つですが、それよりも何よりも、日常生活の中での有用感を味わわせることに力を入れました。

まず「係活動」について、自分たちで考えさせることは勿論ですが、楽な仕事を考えるのではなく、学校全体が恩恵を被る、喜ぶという視点で考えさせました。出てきた係活動の一部を紹介しますね。「草取り係」「リサイクル係」「時間係」…。「草取り係」は読んで字の如く、学校敷地内の草取りを行います。運動会が5月実施、正門付近の斜面が草が多いということもあり、そこの草取りをやるというのです。時間を決めて活動するということにも意味があります。始業前に活動です。草取り係はいわゆる問題を起こしていた子ども達でしたので、私も一緒に草取りをしました。そして、活動の終わりに反省会。と言っても、みんなで集まって「お疲れ様!」と私が声をかけ、子ども達も声を合わせて「お疲れ様でした!」と声をかけるだけです。その後、朝のランニングへ移動でした。「リサイクル係」は、学校敷地内に何故か置いてある殆ど使わない物を集めて、整理整頓していく係です。この係は先生方からも感謝の言葉を頂きましたし、先生方が整理整頓の意識を持ち始めるという2次的な効果もありました。「時間係」は、休み時間の終わり等に活動します。昼休み中に遊びに行く子ども達、当然熱中して時間も忘れます。そこで係が大声で叫びます。「掃除始まるぞ～!」これで仕事は終わりです。でもこれが効果覿面でした。6年生が声をかけることによって、あっという間に下学年が校舎に入っていきました。最高学年としての自覚も出てきたようでした。

このような係活動を行う中で、職員には「褒める」ことを協力要請していました。子ども達は事あるごとに褒められ、自己有用感が飛躍的に向上しましたね。これまでにやっていた係活動はどうしたのか?簡単なことです。これまでの係活動を、6年生なら出来て当たり前という視点から考え直し、それまであった殆どの係活動が削除されました。例えば「落とし物係」。高学年なら持ち物に名前を書くのは当然だ、落とし物があれば本人に届ければいいという考えから、無しになりました。「掃除係」これも絶対やらなければならないこととして削除されました。このようにして、多くの係活動が無くなり、新しい活動が生まれていきました。そこには当事者としての意識が芽生えつつありました。

当時を振り返る時、私はこう思います。思春期、あるいはその入り口にある児童達ですから、大人として扱う側面と、子どもとして接する側面とをうまく混ぜることが重要だと。少し背伸びしたい時期なんですよ、高学年は。でも、躓いたときは頼りになる大人に助けを求めるんです。何だかんだ言って子どもですから、うまく導くことのできる「灯台」が必要なのです。まずは自由に行動させながらいざという時、適切に誘導する役目が私達教師であり、保護者であるのです。私にとって平成21年度は、私のこの考え方が集団にベストマッチした1年でした。この子達は、多くの場面で結果を出していきました。（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）